

はじめに

流行することを狙って製作されるレコードは、作詞・作曲・歌手の三位一体で世に送り出される。

日本で流行歌の嚆矢となったのは、昭和初期、ビクターから発売された藤原義江の「出船」
「銚子をおさめて」だった。

ヒット曲の基準となる十萬枚単位のレコードが生まれたのは昭和三年の「波浮の港」が最初で、野口雨情の詞に、中山晋平が「四七抜き」短調の哀愁をそそるメロディーを付け、佐藤千夜子が歌った。つづいて、「われらのテナー」藤原義江が歌い、両者合わせて十數万枚という当時としては、驚異的なヒットとなった。

『ビクター・音の開発史』（私家版）は、

「この思わぬヒットは、レコードが歌の強力な媒介となりうることを示したことは明らかであった。以来、日本のレコード会社は、ヒット曲の企画に全力を注ぐようになり、本格的な流行歌——歌謡レコード時代の幕が切っておとされる。」

と述べている。

レコードの営利性に目覚めたビクターは、ヒット曲の企画に走り始め、その第一弾が、作詞・

時雨音羽、作曲・佐々紅華、歌・二村定一の「君恋し」と、作詞・西條八十、作曲・中山晋平、歌・佐藤千夜子の「東京行進曲」であった。

「東京行進曲」は、菊池寛原作の人気小説を日活で映画化した時、歌と映像のコラボによる相乗効果を狙った主題歌だった。原作は「面白くて為になる」を謳った野間清治の率いる大日本雄弁会講談社の百万部雑誌『キング』に連載された小説である。

作詞は、早稲田大学で仏文学の教鞭をとる詩人・西條八十で、彼は当てようとして、思いきり調子を下ろして書いていた。

西條八十は大正の半ば、雑誌『赤い鳥』に「かなりや」を発表、一躍、知られた詩人だった。フランスへ留学もしている大学教授が、流行歌の作詞に筆を染めたとあって、音楽評論家の伊庭孝は「江戸っ子の面汚し」「先祖の助六に濟まない」などの個人攻撃を、ラジオの全国放送で三十分にわたって行っていた。

流行歌は、このように当初は、市民権の得られない継子扱いに甘んじなければならなかったのである。特にインテリや教育者からは目の敵かたきにされていた。

インテリのさげすみの対称でしかなかった流行歌の歌詞に、市民権が与えられたのは昭和十一年代になった頃からだろうか。

さらに戦時下になると、歌は青少年を皇国日本の尖兵と煽るプロパガンダの役割を担わされるまでになった。

戦後は一挙に、歌詞として使われる言葉の範囲は広がり、外国の言葉とミックスされてポードレス時代に入っていた。

本書には、昭和の時代に活躍した二十人の作詞家の横顔と、その代表作を五曲とりあげている。

生涯に多い人なら三千から五千曲は作っている作詞の世界で、「二十人と五曲」とは、いかにも些少であるが、小冊子故、多くは望むべくもなく、五曲で収めることはむずかしかった。選考にあたって、売上枚数はもちろん、「紅白」で歌われた曲、「レコード大賞」の受賞曲など各種の資料は基準にはしたが、私の独断と偏見のそしりは覚悟の上である。

そして、枚数の関係で「君の名は」などの菊田一夫、「かえり船」などの清水みのる、「高校生三年生」などの丘灯至夫、「ブルー・シャトウ」などの橋本淳、さらに「横須賀ストーリー」の阿木耀子など、錚々たる作詞家を紹介できなかつた非力、失礼をご寛恕いただきたい。

塩澤 実信

歌謡曲が輝いていた時

昭和の作詞家20人100曲

● 目次

はじめに

..... 1

佐藤惣之助(さとう・そうのすけ)

..... 13

「赤城の子守唄」

「緑の地平線」

「人生の並木路」

「人生劇場」

「湖畔の宿」

西條八十(さいじょう・やそ)

..... 29

「東京音頭」

「旅の夜風」

「支那の夜」

「三百六十五夜」

「絶唱」

藤浦洸(ふじうら・こう)

..... 45

「一杯のコーヒーから」

「悲しき口笛」

「水色のワルツ」

「東京キッド」

「銀座九丁目水の上」

高橋掬太郎(たかはし・きくたろう)

..... 61

「酒は涙か溜息か」

「啼くな小鳩よ」

「かりそめの恋」

「ここに幸あり」

「古城」

佐伯孝夫(さえき・たかお)

..... 77

「鈴懸の径」

「東京の屋根の下」

「銀座カンカン娘」

「潮来笠」

「寒い朝」

サトウハチロー

……………
93

「目ん無い千鳥」

「リングの唄」

「夢淡き東京」

「長崎の鐘」

「悲しくてやりきれない」

藤田まさと(ふじた・まさと)

……………
109

「旅笠道中」

「明治一代女」

「麦と兵隊」

「大利根月夜」

「岸壁の母」

岩谷時子(いわたに・ときこ)

……………
125

「恋のバカンス」

「ウナ・セラ・ディ東京」

「君といつまでも」

「お嫁においで」

「おまえに」

川内康範(かわうち・こうはん)

……………
141

「骨まで愛して」

「君こそわが命」

「伊勢佐木町ブルース」

「花と蝶」

「おふくろさん」

石本美由起(いしもと・みゆき)

……………
157

「憧れのハワイ航路」

「逢いたいなアあの人に」

「港町十三番地」

「柿の木坂の家」

「長良川艶歌」

星野哲郎(ほしの・てつろう)

……………
173

「函館の女」

「三百六十五歩のマーチ」

「男はつらいよ」

「昔の名前で出ています」

「兄弟船」

横井弘（よこい・ひろし）

「あざみの歌」

「哀愁列車」

「山の吊橋」

「川は流れる」

「下町の太陽」

永六輔（えい・ろくすけ）

「黄昏のビギン」

「遠くへ行きたい」

「見上げてごらん夜の星を」

「こんにちは赤ちゃん」

「いい湯だな」

.....
205

.....
189

吉岡治（よしおか・おさむ）

「真赤な太陽」

「真夜中のギター」

「さざんかの宿」

「細雪」

「命くれない」

山上路夫（やまがみ・みちお）

「翼をください」

「瀬戸の花嫁」

「学生街の喫茶店」

「ひなげしの花」

「私鉄沿線」

阿久悠（あく・ゆう）

「また逢う日まで」

「北の宿から」

.....
253

.....
237

.....
221

「津軽海峡・冬景色」

「舟唄」

「熱き心に」

山口洋子(やまぐち・ようこ)

「よこはま・たそがれ」

「夜空」

「うそ」

「千曲川」

「ブランデーグラス」

なかにし礼(なかにし・れい)

「今日でお別れ」

「天使の誘惑」

「人形の家」

「石狩挽歌」

「北酒場」

……………
269

……………
285

荒木とよひさ(あらかき・とよひさ)……………

「哀しみ本線日本海」

「もしも明日が…。」

「そして…めぐり逢い」

「時の流れに身をまかせ」

「ガキの頃のように」

千家和也(せんげ・かずや)

「雨」

「そして、神戸」

「なみだの操」

「ひと夏の経験」

「年下の男の子」

……………
317

301

★作詞者は生年順に掲載しました。

★曲目は発売順に掲載しました。

★文中敬称は省略させていただきました。

歌謡曲が輝いていた時

昭和の作詞家
20人
100曲

佐藤惣之助

(1890 ~ 1942)

神奈川県川崎市生まれ。佐藤紅緑に師事し、俳句を学ぶ。1916年、処女詩集『正義の兜』で注目されるが、のち歌謡詞に転向。二度目の妻は詩人・萩原朔太郎の妹・愛子。



● 詩から詞へ転身

作詞家生活十年足らずで、四十曲に余るヒットソングを生み出したのが、佐藤惣之助であった。

現在ではなじみの薄い名前だが、次に書く曲名を見れば、何曲か聞いたことがある、歌える、懐しいメロディーだと思う人もきつと少くないだろう。

「赤城の子守唄」竹岡信幸作曲、東海林太郎歌
「緑の地平線」古賀政男作曲、楠木繁夫歌

「人生の並木道」古賀政男作曲、ディックミネ歌

「青い背広で」古賀政男作曲、藤山一郎歌

「人生劇場」古賀政男作曲、楠木繁夫歌

「新妻鏡」古賀政男作曲、霧島昇・二葉あき子歌

「湖畔の宿」服部良一作曲、高峰三枝子歌

昭和七年に「朝顔の唄」(古賀政男作曲、関種子歌)で初ヒットし、翌八年に「大阪音頭」(佐々紅華作曲、藤本二三吉歌)でもそこそこのヒットで知られた作詞家だった

たが、昭和九年になると、東海林太郎が歌い大ヒットした「赤城の子守唄」で、一躍知られた存在になった。

翌十年に入ると、古賀政男作曲、楠木繁夫の歌で「白い椿の唄」、古関裕而作曲、淡谷のり子の歌で「三日月娘」、阿部武雄作曲、東海林太郎歌で「むらさき小唄」、そしてヒットメーカー古賀政男とのコンビで「緑の地平線」（楠本繁夫歌）、「ゆかりの唄」（ディックミネ歌）で、不動の人気作詞家になったのである。

佐藤は支那事変が勃発する

と「バラは咲けど」（古賀政男作曲、藤山一郎歌）、「浅草の灯」（古関裕而作曲、伊藤久男歌）といった流行歌を作詞する一方で、時局に迎合した「敵前上陸」（長谷川堅二作曲、霧島昇歌）、「南京だより」（山田栄一作曲、上原敏歌）、「北満だより」（三界稔作曲、上原敏歌）、「暁の決死隊」（細川潤一作曲、三門順子歌）などを作詞している。

その流れの中でもっとも歌われたのが「燃ゆる大空」で、クラシック界の大御所・山田耕筰が作曲し、霧島昇と藤山一郎らが歌った。航空思

想普及を企てた陸軍協力の映画『燃ゆる大空』の主題歌で、日本初の航空映画であり、航空機の出動機数は九百機に及んだ。映画の画面と、航空写真が美しく好評だった。

佐藤惣之助は、歌謡曲に作詞を転じてから、またたく間に売れっ子になったが、大正五年に詩集『正義の兜』を刊行以来、『季節の馬車』『颯風の眼』等、昭和九年までに二十三冊の本格的詩集を出版しているながら、詩では暮らせない状態だった。

彼は、表向きは大正詩壇の輝やける星の一つに位置づけ

られていたが、生計の大半を妻・花枝の長唄の教授料に頼っていて、このままでは前途は知れている。

思案の末に相談を持ちかけたのが、詩人仲間の松村又一であった。

松村もまた、純粹な詩集では食べていけなくて、歌謡の分野の詞を作りはじめていたので、佐藤のこの悩みは充分理解でき、詩から詞への転身には、双手を挙げて賛成してくれた。

そして、「赤城の子守唄」が大ヒットするが、詩壇における輝やける星が、一転、大

衆向きの流行歌で、それも「赤城の子守唄」などという当時は低俗と評していた歌謡で大当りをしたと知った詩人仲間は、半ば羨望、半ば軽蔑の眼差しで往年の星を眺めていたのである。

● ヒットには無関心？

しかし、ヒットの鉅脈をさぐり当てた佐藤は、「緑の地平線」「男の純情」「人生の並木路」「青い背広で」「人生劇場」「湖畔の宿」と、矢継ぎ

早にヒットを連発。

彼と名コンビの古賀政男は、佐藤について著書『自伝

わが心の歌』で次のように述べていた。

「惣之助さんは初めのうちは、かなり観念的な詩を書いていた。大衆詩としては、どうも素直に飲みこめないところもあった。しかし義太夫が好きで、たいていのサワリは全部頭に入っているような人だったから、その情趣を現代に置き換えたような作風を体得してからは、次々にすばらしい詩を書いてくれた。

平易な言葉で心をえぐるような調子があり、曲によく乗ったし、よくメロディーを誘い出してくれた。」

西條八十

(1892 ~ 1970)

東京都生まれ。早稲田大学文学部卒。早稲田大学教授。デビュー詩集『砂金』で注目される。歌謡曲だけでなく童謡にも名作が多く北原白秋と並ぶ大正・昭和期を代表する詩人。



● 国中を踊らせた

大衆の好みに合い、広く歌われる歌謡を流行歌というが、この種の歌が蓄音機の普及により、レコードによって、より広く流行しはじめたのは、昭和に入ってからである。

その走りとなったのが「東京行進曲」であった。文壇の大御所と畏敬された菊池寛が、講談社の百万部雑誌『キング』に連載していた人気小説を、昭和四年、日活で映画化したとき、その主題歌として、作詞を当時、新進の詩人

だった西條八十が書き、中山晋平が作曲したのである。

西條は、フランスへ留学し、象徴詩に傾倒していた詩人であるが、早稲田大学仏文科の教授だった。

その高踏派詩人が、流行歌の作詞を引き受けた裏には、東京を一瞬に潰滅させた関東大震災の夜の貴重な体験と、定型詩一筋にきた美学へのこだわりがあった。

大正十二年九月一日深夜の体験とは、命からがら上野の山へ避難してきた群衆の中で、少年が無心にふくハーモニカのメロディーに、絶望の

測に立つ人々が、心をいやさ
れているシーンを見ていたか
らだった。

「こんな安っぽいメロディー
に、これだけの人が楽しんで
いる。これだけの人に慰樂と
高揚を与えられる。俗曲もい
いものだ……」

西條八十はそのとき、大衆
のための仕事の価値をしみじ
み認めたのだった。

いま一つ、定型詩へのあこ
がれとは、当時、自由詩運動
が起っていて、西條が磨きに
磨いた定型詩の技術のやり場
に困り、その不満のはけ口を
流行歌に求めようとしたこと

だった。

西條は、「東京行進曲」の
作詞に当って、思いきってレ
ベルを下げ、詩にはなじまな
い「ジャズ」「ダンス」「丸
ビル」「地下鉄」「シネマ」「デ
パート」など、当時のモダン
な風景と生々しい言葉を、臆
面もなく詞の中に織り込んで
みた。

映画『東京行進曲』には、
入江たか子、夏川静江、見明
凡太郎、小杉勇らの人気俳優
が出演。その相乗効果でレ
コードは、台湾、朝鮮など植
民地まで加えた日本で、蓄音
器がわずか十万台といわれて

いた時代に、二十五万枚も売
れるという空前のヒットと
なった。

だが、この歌はさまざま
酷評や痛論にさらされた。N
HKが放送を断行するや、音
楽評論家の伊庭孝は、「江戸っ
子の面よごし」「先祖の助六
に濟まない」といった個人攻
撃を西條に浴びせたのであ
る。

しかし、そんな西條八十の
もとは、作詞の注文が殺到
した。

昭和六年「泣いて笑って
鯉口切れば 江戸の桜田 雪
が降る」と歌う「侍ニッポン」

が大ヒット。つづいて「女給の唄」「銀座の柳」「天国に結ぶ恋」「涙の渡り鳥」「サーカスの歌」と、世は西條の作詞の独壇場の感があり、さらに昭和八年には、日本中が「ハア踊り踊るならチヨイト 東京音頭 ヨイヨイ……」の「東京音頭」に制圧されることになった。

昭和十三年の夏、軽井沢にいた西條に川口松太郎の小説『愛染かつら』の映画化主題歌の作詞依頼があった。大至急の注文で、わずか二時間で仕上げた歌が「旅の夜風」だった。

花も嵐も

踏み越えて

行くが男の

生きる道

映画も歌も空前のヒットとなるが、西條はこのとき大衆の心を捉えそうな文句を、調子よく綴るヒットのコツをつかんでいた。

「いったいレコードの歌詞というものは、作曲と相まって、聴く者には、厳密な連結を持つ意味などは要らない」のセオリーの発見だった。西條八十は、戦時下には戦争を背景にした作詞を書きつづけるが、その中で、いまも

歌われている歌に、「支那の夜」「蘇州夜曲」「なつかしの歌声」「誰か故郷を想わさる」「同期の桜」「若鷺の歌」など、硬軟とりまぜたヒットがある。

西條は、軍国歌謡を書く一方で、支那事変の緒戦、従軍文化人として、首都・南京陥落後の日本軍の入城式を特別席で見っていた。

その帰途、長江を魚雷艇に乗って下ついているとき、南京から筏で逃げる敗残兵を、日本軍が掃討するのを目撃して、衝撃を受けた。

彼は、長江に漂うジャンク

藤浦 洸^{こう}

(1898 ~ 1979)

長崎県平戸市生まれ。慶應義塾大学文学部卒。伊庭孝に師事。浅草オペラの俳優を経て、1938年、コロムビアに入社、専属作詞家となる。日本作詩家協会会長などを歴任。



● 生来のバガボンド

年端もゆかない少女が、大人の歌を堂々と歌う。楽譜は読めないが、いちどピアノでメロディーを流すか、作曲家が歌ってみせると、この少女は狙った以上の味をピタリと出す。

子供が大人の歌を歌うのだから、ちよつと奇妙なチグハグの感じは否めなかったが、人を魅きつける味が強烈だった。歌手の名は、美空ひばりであった。

歌謡界は、突如出現したこの少女歌手に、カルチャー・

ショックに似た衝撃を受けた。公共放送のNHKは、敬遠策をとりながら洞が峠^{ほら}を極めこんでいた。

作詞家のサトウハチローは、ゲテものと新聞紙上で罵倒していた。そんな逆風の吹く中で、美空ひばりの才能をいち早く認め、反対を押し切って「あの子は、絶対ものになる。おれが保証する！」と断言したディレクターがいた。コロムビアレコードの根村唯由である。

伊藤正憲文芸部長も、根村といっしょにひばりの有楽座の舞台をのぞいて、

「あの子は商売になる。引っぱってこい！」と命じたが、スタッフのほとんどは、大人びた声で大人の歌をうたう少女歌手を迎えることには、背を向けていた。

紆余曲折を経て、ひばりはコロムビアへ迎えられ、昭和二十四年夏、「河童ブギ」でデビューするが、作詞を担当したのは、昭和初期からタンゴ、ブルース、ボレロといった欧米風のメロディーの名手・服部良一とのコンビで、ヒットを連発していた藤浦洸であった。

藤浦のヒットの数々を知る

者には、大人顔負けの巧みな歌手とはいえ、NHKが敬遠し、作詞界のドンだったサトウハチローが、ゲテもの呼ばわりしているひばりのオリジナルを書く行為に「？」を感じたはずであった。

藤浦のヒットした戦前の歌を並べてみると、^{かくかく}赫々たるものであった。

昭和十二年「別れのタンゴ」
(平川英夫作曲、淡谷のり子歌)

昭和十二年「別れのブルース」
(服部良一作曲、淡谷のり子歌)

昭和十三年「バンジョーで唄えば」
(服部良一作曲、中野忠晴歌)

昭和十四年「一杯のコーヒーから」
(服部良一作曲、霧島昇・ミスコロムビア歌)

昭和十四年「チャイナ・タンゴ」
(服部良一作曲、霧島昇・ミスコロムビア歌)

昭和十四年「広東ブルース」
(服部良一作曲、渡辺はま子歌)

昭和十四年「懐しのボレロ」
(服部良一作曲、藤山一郎歌)

昭和十四年「長崎のお蝶さん」
(竹岡信幸作曲、渡辺はま子歌)

高橋掬太郎

(1901 ~ 1970)

北海道根室市生まれ。函館日日新聞の社会部長兼学芸部長時代の「酒は涙か溜息か」がヒット。1933年、上京、作詞家活動を開始。石本美由起、宮川哲夫らを育てた。



● 投稿の作詞が大ヒット

昭和五年から六年は、昭和
大恐慌と呼ばれ、日本が最悪
の事態を迎えた年だった。国
民総生産（GNP）を見ると、
恐慌前の昭和四年を一〇〇と
すると、五年は八九・一、六年
は八〇・六と、どん底に落ち
こんでいた。
失業者は街にあふれ、その
数は二百五十万から三百万人
に達し、故郷へ帰るにも旅費
がなく、線路筋をとぼとぼと
歩いて帰る失業者の姿が多く
見られた。

労働争議は増加し、東北・

北海道は「凶作飢饉」に見舞
われ、娘を百円足らずで売っ
て窮地からの脱出をはかる人
もいた。

白米十キロが一円六十九
銭、大工の手間賃が一日、二
円二十八銭といわれていた当
時の百円である。

活動写真に弁士が付いて、
場面に合わせてペラペラと
しゃべっていたのに、トー
キー映画の出現で弁士無用と
なるのはこの頃からで、徳川
夢声、大蔵貢などは弁士失職
となつて、漫談や映画館経営
へと転職を余儀なくされた。

漫才や落語がはやつたのも

この頃からで、カフェやバーにサラリーマンが顔を出すようになり、店に備えつけられていた蓄音器をかけて、流行歌に耳を傾けるのがモダンな風景と見られるようになっていた。

この要請に応じて、レコード業界では各社あげてヒットを狙い作詞に知恵をしぼり、旋律に工夫をこらして格好の歌手に歌わせる、いわゆるディレクター・システムが整っていった。

北海道は函館市の函館日日新聞社の社会部長兼学芸部長・高橋掬太郎から、日本コ

ロムビア文芸部所属の新進作曲家・古賀政男宛に、二行詞、四連の「酒は涙か溜息か」が送り届けられてきたのは、古賀が作曲した「乙女心」（関種子歌）、「日本橋から」（同）、「チャッカリしてるわね」（天野喜久代歌）「キャンプ小唄」（藤山一郎歌）「月の浜辺」（河原喜久恵歌）の五曲が、一気に発売された昭和六年の六月だった。

流行歌が起承転結のセオリーを踏んで、四行、五行、六行の形式で書かれているときに、高橋掬太郎から届いた詞は、次の通りだった。

一

酒は涙か 溜息か

心のうさの 捨てどころ

二

遠いえにしの かの人は

夜毎の夢の せつなさよ

三

酒は涙か 溜息か

悲しい恋の 捨てどころ

四

忘れた筈の かの人に

残る心を なんとしよう

字足は七・五、七・五の二行で、四連となっているユニークさが新鮮だった。

作曲を頼まれた古賀政男

佐伯孝夫

(1902 ~ 1981)

東京都生まれ。早稲田大学文学部卒。西條八十に師事。新聞記者を経て1939年、ビクターの専属となる。吉田正と組んで多くの都会派歌謡のヒット曲を生み出した。



● 四十年で百五曲のヒット

昭和の作詞王といえは西條八十を指すだろう。その西條門下生で、師を凌ぐ数のヒット曲を、ビクターで書きつづけたのが、新聞記者上りの佐伯孝夫である。

昭和九年、中山晋平作曲、歌は小唄勝太郎、三島一声、徳山璉の競作で「さくら音頭」をヒットさせ、昭和五十年、吉田正作曲、橋幸夫歌の「花の喧嘩旅」に至る四十一年間に、ヒット曲と認められる売上げ枚数の詞は、ざっと数えると百五曲もある。

ヒット率が二、三%の歌謡界で、百余のヒット曲の裏には、おびただしい数の知られざる曲があつたはずだ。それを考えると、このヒット数は尋常ではない。

佐伯孝夫はビクターの専属ほぼ一筋だつた関係で、戦前は佐々木俊一と組み、灰田勝彦や小畑実に作詞をしていたが、戦後は吉田正とのコンビで、吉田門下のフランク永井、鶴田浩二、松尾和子、橋幸夫そして吉永小百合らに詞を提供した。

一覧表を見ると、佐伯の歌は作曲、歌手のコンビの片寄

りに驚かされる。一例をあげれば、戦後は吉田正作曲のヒットが七十%を越えているのである。歌手は当然、吉田門下生に限定されていた。

吉田は、佐伯孝夫の手引きで作曲界に登場していて、佐伯が昭和二十三年八月一日のNHKの人気番組『NHKのど自慢』を、つれづれに聞いていなかったら、吉田は、別の人生を辿っていたに間違いないだろう。

佐伯がその日、『NHKのど自慢』に耳を傾けていると、シベリアからの復員兵と名のる中村耕造なる人物が出

場し、歌う前に、

「この歌は、シベリアの抑留所で誰がつくったかわからな
いままに歌われていた望郷の
歌でした。私たちは厳しい寒
さと重労働の合間に、この歌
を歌って励まし合ってきまし
た」

と、口上を述べた上で、朗々と響く声で、

今日も越え行く 亦山またを
黒馬あおよ辛かる 切なかる
がまんだ 待つてろ

あの嶺越えりや
甘い清水を 汲んでやる

と、名も知らぬ兵の作った
素朴な望郷歌を歌ったのであ
る。

市川の自宅で寝っ転がっ
て聞いていた佐伯孝夫は、
とつさに「いい曲だ。受ける
ぞ」と新聞記者時代に鍛えた
ジャーナリスティック感覚で
速断。翌朝、専属のビクター
の磯部ディレクターに知らせ
たのである。

磯部は直ちにNHKへ駆け
つけ、レコード化の話をつけ、
他社とは鼻の差で権利をつか
み、発掘者の佐伯がのど自慢
で歌われた詞に手を加え、清
水保雄の編曲を経て、竹山逸

サトウハチロー

(1903 ~ 1973)

東京都生まれ。作家・佐藤紅緑の長男。本名八郎。旧制早稲田中学中退。作家・佐藤愛子は異母妹。父への反発から若い時から放蕩をくりかえす。JASRAC 会長などを歴任。



●放蕩詩人ハチロー

人口に膾炙した言葉に「歌は世に連れ 世は歌につれ」がある。

流行歌が、時代の風潮を写す鏡の役割りを果しているところを見るにつけ、この慣用語はうなずける。

この言葉に照らしてみると、日本国民の空前の体験だった「敗戦」直後の昭和二十一年大流行した「リングゴの唄」は、軍国主義の桎梏から解放された感じの明るさのただよう歌だった。サトウハチロー作詞、万城目正作曲、

並木路子と霧島昇（オリジナル版のみ）が歌っていた。

GHQ検閲第一号の松竹映画『そよかぜ』の主題歌で、この歌にはそれまでの流行歌にはなかった、大衆に歌うことを呼びかける革新的な詞藻と、明るい曲想がこめられていた。

映画の『そよかぜ』は、劇場のしがえない照明係の「みち」と名付けられた乙女を、バンドのメンバーが応援し、スターとしてデビューさせるまでを描いていた。バンドのメンバーには、人気スター上原謙、佐野周二。さらに歌手の

霧島昇、二葉あき子らが出演し、ヒット曲を歌っていた。

並木路子が「リンゴの唄」を歌って大ヒットした当時、リンゴの値段は一個五円という高額だった。現在に換算すれば、五千円に相当するだろう。

サトウハチローは、「あゝ王杯に花うけて」などの熱血小説で一世を風靡した、佐藤紅緑の長男に生まれ、若くして童謡、詩、スポーツ小説を書いていた。

一方、歌謡曲は、サトウハチローのほか、陸奥速男、玉川映二、星野貞志、山野三郎、

清水士郎など数十名の別名を使って、奔放に書きまくっていた。

ハチローが詩人になったきっかけは、父・紅緑が、実母のはるを離婚に迫いやり、舞台女優の三笠万里子と同棲の末、結婚に至る修羅場を、中学生時代に見ていたことだった。

父への反発から生活は荒れ、落第、退校、勘当、留置場入りを重ねた上、感化院のあった小笠原諸島の父島で、父の弟子であった詩人の福士幸次郎と生活をともにするうちに、影響を受けて詩に目覚

め、福士の紹介で西條八十の門下生になって童謡を書きはじめ、数々の雑誌や新聞に掲載されたのである。

今東光、草野心平、宮沢賢治ら、後年名を成す作家や詩人らの同人誌に参加し、大正十五年、二十三歳のとき処女詩集『爪色の雨』を出版。

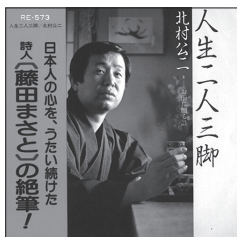
しかし、詩では生活ができない。昭和に入ると、詩集を刊行する一方、少年少女小説、ユーモア小説を書きまくり、映画の主題歌から、流行歌の作詞を盛んにするようになった。

まず、童謡で山野三郎名義

藤田まさと

(1908 ~ 1982)

静岡県牧之原市出身。本名正人。明治大学を中退し、ポリドールに入社。制作部長、文芸部長を歴任しながら作詞活動を行う。1978年、日本レコード大賞特別賞。



● 心憎い作詞術

「道中」とは、旅の途中とか、遊女がくるわの内を盛装してねり歩くことの意味である。流行歌の一分野に、道中ものを創り出したのは昭和の戦前、ポリドールのディレクターのかたわら、作詞を手がけていた藤田まさとであった。

藤田は、昭和九年、ディレクターとして東海林太郎に、松竹映画『浅太郎赤城の唄』の主題歌「赤城の子守唄」を歌わせて大ヒット。

つづいて、「国境の町」「旅

笠道中」「野崎小唄」「すみだ川」と、東海林太郎による四連続の大ヒットを飛ばしていた。

このうち、道中ものの第一弾「旅笠道中」は、藤田自身の作詞、大村能章の作曲だった。

道中ものの第二弾「妻恋道中」も、当然、東海林が歌う予定になっていた。が、藤田と東海林太郎の間に、行きちがいがあって、新人の上原敏にお鉢が廻ってきた。

ディレクターでもある藤田は「妻恋道中」の二行目のフレーズに「投げて長どす 永

の旅」と頭譜に「な」を三つ重ねる凝りようで、詞に愛着が深かっただけに、作曲の阿部武雄に入念な曲想を練らしていた。東海林太郎を世に出しているディレクターは、自らの作詞した「妻恋道中」に期待するところが大きかったのである。

ところが、予定していた東海林が歌わないことになり、急遽「月見踊り」「恋の編笠」でデビューしたばかりの上原敏をピンチヒッターに、特訓に特訓を重ねて、デッドボールをうけてでも、出塁させる魂胆だった。

幸い上原敏の歌った「妻恋道中」は、当時としては超大ヒットともいえる四十万枚も売れ、上原敏はこの一曲でスターダムに駆け上り、作詞の藤田まさとも地盤を固めることができた。

藤田は、阿部武雄とのコンビで「流転」の作詞によってさらにヒットを飛ばした。流行する歌は、歌い出しの二行で決まるのジンクスがあるが「流転」は、その鉄則に叶っていた。

一番が「男命をみすじの糸に かけて三七二十一のめくずれ」、二番は「どうせ一度

は あの時とやらへ 落ちて流れて行く身じゃないか」、そして三番も「意地は男よ情は女子 ままになるなら男を捨てて」と、ディレクターにして作詞家は、そのあたりの呼吸を憎いほどに心得た歌づくりをしていた。

ところが、その名手にして、火野葦平原作の『麦と兵隊』の作詞に当たったとき、最初のフレーズは、

ああ 生きていた
生きていた

生きていました

お母さん

と書いて、「生きていた」

岩谷時子

(1916～2013)

日本統治下の朝鮮京城生まれ。神戸女学院大学英文科卒業。宝塚歌劇団で機関誌『歌劇』の編集長を努める。越路吹雪と出会い、マネージャーとなる。かたわら作詞活動を開始。



●越路吹雪に伴走

昭和の四十年代半ばから五十年代前半にかけて、超一流のエンタティナーとして、観客の心を鷲づかみにした歌手がいた。

宝塚歌劇団の男役スター時代、ヅカファンのおこがれのものであり、スケールの大きなアクションと歌によって、一時代を築きあげた越路吹雪である。

この越路と異身同体的な存在だったのが岩谷時子で、彼女は神戸女学院大学の英文科を卒業後に、宝塚歌劇団出版

部に就職したことから、八歳下のタカラジェンヌと形影の関係になった。

越路の死まで越路のマネージャーを務め、作詞家として成功したあとでも、本業はと聞かれれば、必ず「越路吹雪のマネージャー」と答えていたという。

昭和十四年頃のことだった。宝塚歌劇の機関誌『歌劇』の編集部へやってきた十五歳の越路吹雪に、自分のサインの見本を書いてほしいと頼まれ、二人で知恵をしぼった後に終生、越路が使い続ける流麗なサインを考案した。

この一件からふたりは意気投合し、岩谷時子は越路の相談役になったが、さらに越路吹雪が宝塚歌劇団を退団して歌手になりたいと言ったとき、岩谷時子も宝塚歌劇団出版部を退職する決意をしたのだった。

宝塚歌劇団を創立し、しくないターミナルの町だった宝塚を、一大歓楽街に変えた阪急社長の小林一三は、秘蔵ツ子の越路が一人では心もとないだろうと、岩谷時子を東宝文芸部に所属替えにし、付き人役として上京させることにした。

八歳年上のマネージャーは、洋服や靴など欲しいものがあれば、見境なく買ってしまう浪費癖の越路のために、自らのポケットマネーを支出する気配りを見せた。

越路はリサイタルの直前になると極度の緊張に襲われ、心ここにあらずの状態に陥ってしまふので、緊張を紛らせるために煙草をくゆらせ、濃いコーヒーを飲ませることも、あえて行っていた。

しかし、ステージには完璧を期する越路は、緊張も極限に達すると、足は震え顔はこわばって見られる状態ではな

かった。

岩谷マネージャーは、そのとき、越路の背中に指先で大きく「トラ」と書き記し、「ほら、あなたは虎よ、何も怖いものはない」

と暗示の励ましをかけて、ステージに送り出した。

リサイタルの数ヶ月前から、衣装を揃え、髪の毛の手入れから、体のプロポーショナルまで準備に怠りのない越路吹雪にして、名マネージャーの「トラ」の暗示が必須だったのである。

さらに、越路吹雪の歌うシャンソンは、すべて岩谷時

男はつらいよ

山本直純 作曲
渥美清 歌

見事なタンカバイ口調で始まる「男はつらいよ」は、フーテンの寅こと、渥美清が歌って一大ロングヒットになった映画主題歌である。

昭和四十四年、山田洋次の脚本・監督、渥美清主演で『男はつらいよ』の題名でスタートし、渥美が肺がんで死去する平成八年まで、二十六年間に四十八作も製作された。ストーリーは、寅次郎が生まれも育ちも同じ葛飾柴又の家を出奔し、足のむくまま、

気のむくまま、テキ屋稼業をやりながら西に東に旅をする。その間に、行く先々で女に惚れて稚拙なプロポーズをするが、最後はフラれて、また在所に戻ってくるといったシリーズだった。

背景は変わっても、筋書きはほぼ同じの「男はつらいよ」は、それでいて渥美清の「怪演」によってマンネリに陥ることがなく、彼の死去するまではエンドレスだったのである。

ギネスブックものの「男はつらいよ」で、渥美清と車寅次郎は完全に一体化してしまった感があった。

松竹映画のドル箱と化した『男はつらいよ』の同名の主題歌を作詞したのは星野哲郎、作曲はクラシック畑の山本直純だった。

この異色ある主題歌を、渥美清は寅さん特有のギャグでいえば「聞くものの「ゲツ」まで届く口跡でウナリ、プロの歌い手とは一味も二味も違う、けっこう毛だら灰だらけの歌」を聞かせてくれたのだった。

横井 弘

(1926～2015)

東京都生まれ。帝京商業学校卒。終戦とともに家族で長野県下諏訪町に転居。上京して藤浦洸に師事。1949年、「あざみの歌」がNHKラジオ歌謡として大ヒット。



●空襲の傷痕を背に

太平洋戦争の末期、東京は、サイパン島から飛来するB29ちようりようぼつこの跳梁ちようりようぼつこ、跋扈の下にあった。延べ百六回の空襲を受けていて、昭和二十年三月十日と五月二十五日の大空襲によって、政治・経済・文化を含め首都の機能の過半は喪失していた。

後に「おさらば東京」「銀座の蝶」「下町の太陽」「ネオン川」など、復興した東京の町を作詞しヒットさせる横井弘は、四谷の生家を五月二十五日の空襲で全焼し、そ

の一ヶ月足らず後に召集されて、竹槍を武器に茨城県の沿岸防備隊に配属された。

幸い八月十五日に終戦となり、長野県下諏訪町に疎開していた母の下に、復員できたものの、敗戦直後の大混乱期ですぐ仕事にありつける当てはなかった。

横井は、諏訪湖畔や八島ヶ原湿原を散策する日々に、若さを発散させていたが、とある日、湿原に咲く紫紅色の一轮の花を見つけた。菊科の多年草のアザミだった。

この花は日本に六十種あるといわれていて葉は大形で深

い切れ込みがあり、とげが多く、かなりの高さに成長した茎の頭上に、一輪の花を咲かせる植物だった。

植物図鑑で調べると、およそそんな解説がしてあったが、つい数日前まで本土上陸を企む米軍を、波打ち際で撃退すべく、肉弾攻撃の訓練を受けていた身には、一輪のアザミの花が、生きるよろこびを教え論しているように見えたり。

横井は、短い入隊期間中に盲腸で入院したこともあり、その折に戦友たちの歌う「湖畔の宿」とか「誰か故郷を想

わざる」に慰められ、これらの歌に魅かれて、作詞家への道を志していた。

その下地があつて、彼はアザミの花の感動を一篇の詞に綴ってみた。すでにそのとき彼のノートには、三十篇近くの詞が書かれていた。

昭和二十一年、東京へ戻った彼は、キングレコードの臨時雇いになることが出来た。作詞家を志していた横井にとつて、願ったり叶ったりの職場であつた。が、制作の現場に立つてみると、作詞した本人は傑作と思つても、簡単には採用されなかつた。また、

たとえ作曲され歌われても、オクラになるケースが多かつた。

コロムビアのコンクールで、北島三郎とトップを争つた水前寺清子でさえ、何回となくレコーディングを繰り返し、三年、四年がかりでようやく日の目を見るような状態だった。

有望な歌手でも、苛烈な試練下にあるレコード業界で、作詞、作曲家の卵は掃いて捨てるほどおり、一篇の詞が拾われるのは僥倖だったのだ。横井弘は、詞を見てもらえるチャンスがないまま、会社

参考資料

- 「日本流行歌史」 古茂田信男 他 社会思想社
「日本流行歌変遷史」 菊池清麿 論創社
「この人この歌」 斎藤茂 廣濟堂出版
「歌謡曲の構造」 小泉文夫 冬樹社
「昭和の流行歌の軌跡」 池田憲一 白馬出版
「歌謡・いま・昔」 毎日新聞社学芸部 音楽之友社
「わたしのレコード 100 年史」 長田暁二 英知出版
「歌でつづる 20 世紀」 長田暁二 ヤマハミュージックメディア
「精選盤 昭和の流行歌」 長田暁二、他 ユーキャン
「にほんのうた」 北中正和 新潮文庫
「紅白 50 回 栄光と感動の全記録」 NHK サービスセンター
「サウンド解剖学」 宮川泰 中央公論社
「不滅の歌謡曲」 なかにし礼 日本放送出版協会
「歌謡曲から『昭和』を読む」 なかにし礼 NHK 出版新書
「歌謡曲の時代」 阿久悠 新潮社
「歌謡曲って何だろう」 阿久悠 日本放送出版協会
「ハマクラの音楽いろいろ」 浜口庫之助 朝日新聞社
「阿久悠のいた時代」 篠田正浩・斉藤慎爾編 柏書房
「なつめろの人々」 藤浦洸 読売新聞社
「どうにもとまらない歌謡曲」 舌津智之 晶文社
「そして歌は誕生した」 NHK 土曜特集班編 PHP 研究所
「日本のポピュラー史を語る」 村田久夫・小島智編 シンコー・ミュージック
「美空ひばり」 竹中労 朝日文庫
「この歌 この歌手」上・下 読売新聞文化部 社会思想社
「日本レコード文化史」 倉田喜弘 岩波現代文庫
「酒と演歌と男と女」 猪俣公章 講談社
「歌 いとしきものよ」 星野哲郎 集英社
「演歌巡礼」 船村徹 講談社
「歌謡曲ベスト 1000 の研究」 鈴木明 TBSブリタニカ
「自伝 わが心の歌」 古賀政男 展望社
「鐘よ鳴り響け」 古関裕而 主婦の友社
「夢人生を奏でて」 古賀政男 小学館スクウェア
「ぼくの音楽人生」 服部良一 日本文芸社
「翔べ！わが想いよ」 なかにし礼 東京新聞出版局
「六・八・九の九」 永六輔 中央公論社
「なぜか売れなかったぼくの愛しい歌」 阿久悠 河出文庫
「よみがえる歌声」 林家たけ平 ワイズ出版
「誰よりも君を愛す」 吉田正 金子勇 ミネルヴァ書房
「体験的音楽論」 いずみたく 大月書院
「海鳴りの詩」 小西良太郎 集英社
「うた王国・百鬼夜行」 小西良太郎 廣濟堂出版
「昭和流行歌スキャンダル」 島野功緒 新人物文庫
「あの素晴らしい曲をもう一度」 富澤一誠 新潮新書
「カラオケ中年隊がゆく」 カラオケ中年隊編 文春文庫

塩澤実信（しおざわ・みのぶ）

1930（昭和5）年、長野県生まれ。双葉社取締役編集局長をへて、東京大学新聞研究所講師等を歴任。日本ペンクラブ名誉会員。元日本レコード大賞審査員。主な著書に「雑誌記者池島信平」（文藝春秋）、「ベストセラーの光と闇」（グリーンアロー出版社）、「動物と話せる男」（理論社）、「出版社大全」（論創社）、「ベストセラー作家 その運命を決めた一冊」 「出版界おもしろ豆事典」 「昭和歌謡 100 名曲 part.1 ～ 5」 「昭和の歌手 100 列伝 part1 ～ 3」 「昭和平成大相撲名力士 100 列伝」 「不滅の昭和歌謡」（以上北辰堂出版）、「昭和の流行歌物語」 「昭和の戦時歌謡物語」 「昭和のヒット歌謡物語」 「この一曲に賭けた 100 人の歌手」 「出版街放浪記」 「我が人生の交遊録」（以上展望社）ほか多数。

歌謡曲が輝いていた時 昭和の作詞家 20 人 100 曲

2020 年 2 月 20 日 初版第 1 版印刷

2020 年 2 月 25 日 初版第 1 刷発行

著 者 塩澤実信

発行者 森下紀夫

発行所 論創社

〒 101-0051 東京都千代田区神田神保町 2-23 北井ビル 2F

電話 03(3264)5254 FAX 03(3264)5232 <http://www.ronso.co.jp>

振替口座 00160-1-155266

編集／今井恒雄

装幀／宗利淳一

印刷・製本／中央精版印刷

ISBN978-4-8460-1912-9 ©Shiozawa Minobu 2020 Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

日本音楽著作権協会（出）許諾第 2000667-001 号